



# SMF Press

つながる  
Heart ART

新しい年に向けて、SMFも邁進していきます。

## へんてこな音楽(電子音楽)へ、ようこそ! 柴山拓郎(作曲家) × 高橋博夫(俳人)

高橋 今日「へんてこな音楽」とおっしゃる電子音楽についてのお話を聴かせていただくために柴山さんのご新居にうかがいました。以前に、作曲されたピアノ作品の「Monody」や「蘇州夜曲」(編曲)を聴きましたが、あれはいわゆる普通の音楽でしたよね。

柴山 そう12年くらい前のものです。  
高橋 なぜ、電子音楽を作るようになったんですか。

柴山 器楽曲でも電子音楽でも、作る時にはそんなに違いは感じていません。人が演奏してくれるか、どうかの違いだけでしょうか。

高橋 でも、器楽曲で楽器を選ぶ時みたいに、電子音楽を楽器の選択肢と同じように捉えている人もいますでしょう。そういう場合はどう異なるのかな。

柴山 同じようにコンピュータは使っていますが、我われの音楽はパフォーマンスアートではない、純粋に“音”に向き合うだけの音楽を作りたい。モートン・フェルドマン(1926-1987)には250分くらいの曲があります。ずっとモトーンの単調な景色が繰り返されて時間感覚が失われ、向き合うのは“音”だけになる作品なんです。

高橋 そこに“音”があれば、それでいいと……。

柴山 そもそも何を音楽とするのかとい

う既存の価値基準を解体しなかった、という大きさですが、その与えられた枠のなかで評価を得て創作をしていくことに興味を見出せなかったんです。

高橋 “音”は“声”、“声”は“言葉”、つまりメッセージなのではないでしょうか。禅宗には谷川の流れや鴉の声を聴いて悟ったという逸話があります。聴くことは、精神の奥深くに触れてくる行為、ひたすら耳をすまして“音”を聞くことで新たな発見があるということでしょうね。

柴山 生物の目は環境に適応するなかで形成されたわけで、見えている範囲はきわめて狭い。われわれが見たり感じたりしているフレームを、どう超えられるか。新しいものを作るのが作曲家の仕事で、そこを超えなければ新しいものの創造はできませんね。

高橋 電子音楽には日常や楽器の音を加工するという方法がありますよね。

柴山 何の音を録音して使うのかではなく、どのような“音”を作り込んでいけるかというプロセスが重要です。どんな“音”でも、しかるべき秩序に従って並べれば音楽に聞こえるんです。

高橋 そこには作品としての形の枠のようなものがあるのかな。現代美術では、ただの石でも箱に詰めれば作品になりますが……。

柴山 去年の「SMF音響ライブ」(12/11)のトークセッションで作曲家の生方三郎さんが「これ(電子音楽)は本物の音楽ではない」と言っていました。それは言語学のチョムスキー(1928-)の説く言語の「内在性」と「外在性」で説明がつかず。言葉というのは音声の問題ではなく、それを生み出す機能があるからしゃべれるんだという。人間には本来、音楽を生み出す力が備わっていて、そこから生まれてくるのがいわゆる普通の音楽です。音楽を作る機能は私たちに内在しているわけです。それに対して電子音楽は外にある“音”を並べてみて、それが音楽的に聞こえるかどうかを判断して作っていく。音楽は外在しています。ですから、話すよりは、聴くという方に近いと言えるでしょう。

高橋 そこには作品を評価する基準というものはあるんですか。

柴山 あります。どのようにすれば具体的に音楽に聞こえるのかという基礎的なデザイン力が必要です。時間の経過のなかで“音”を並べていく形式やもの出し方の順番というものを習得しなければなりません。

高橋 西洋音楽のソナタ形式やロンド形式にあたるようなものではないですか。

柴山 形式がないと音楽には聞こえないはず。学生はよく、いちばんおもしろいところを冒険にもってきちゃう。それでは、その後はどうするの、もったいないじゃない、と……。

高橋 作品の展開ということですね。

柴山 それは聴き手の期待感をひきつけるための音楽的なテンションの維持でもあります。また音楽や表現の新規性も大切です。その人にしか作れない何かを発見することです。

高橋 最後になりますが、みなさんに電子音楽をどのように聴いてもらいたいとお考えですか。

柴山 聴いていただいて楽しかったと



高橋博夫(左)と柴山拓郎

禅宗には谷川の流れや鴉の声を聴いて悟ったという逸話があります。

音楽を作る機能は私たちに内在しているわけです。

### SAITAMA 連携美術館情報

**入間市博物館**  
「第15回むかしのくらしと道具展」 12/17~2/12  
市民のくらしや地域の様子をたくさんの生活用具や写真で紹介します。石臼や手作り玩具などの体験コーナーを設け、休日には親子で楽しめるイベントも多数開催されます。

**川崎市立美術館**  
「昭和モダン 藤島武二と新制作初期会員たち」 1/28~3/20  
1936年に「反アカデミックの芸術精神」を掲げ結成された、新制作派協会(現新制作協会)。その創立75周年を記念し、初期会員を中心に時代とのかかわりを展覧します。

**埼玉県立近代美術館**  
「アンリ・ル・シダネル展」 11/12~2/5  
フランスの画家、アンリ・ル・シダネルの全貌を、日本で初めて紹介する展覧会です。薔薇の庭、木漏れ日などの柔らかな雰囲気、観るひとを優しく包み込みます。

今回は、埼玉県立近代美術館の「MOMASの扉」をピックアップします。「MOMASの扉」は、毎週土曜日の13:30から開催されているワークショップです。対象は4歳~大人まで回によって様々。作品について色々な切り口で考えたり、作者になったつもりで制作したり、親子で美術館を楽しんだり、いろいろな体験ができます。また、参加者同士で感じたことを共有することで、きっと新たな発見がありますよ。すぐ満員になってしまうプログラムもあるので、お申し込みはお早めに。(H.O.)



おっしゃってくださる方がいますが、潜在的に普通の価値観ではないものに共鳴して下さっているんだと思います。また、映画を観ているように面白かったという方もいます。“音”だけで視覚的なイメージが生成されてくるのでしょうか。理想的な聴き方というようなものはありませんが、とりあえず電子音楽を作ってみることをおすすめします。わたしのワークショップでは参加者の方が、ご自身で曲を作ってみて、それを聴くことで聴き方が変わることがよくあります。その変化のプロセスが重要なんです。19世紀の初頭以降、音楽はだんだん「へんなもの」になっていきました。1913年にはイタリア未来派のルッソロ(1885-1947)がノイズ(騒音、雑音)だけで音楽作品を作りました。その100年ほどの音楽の変化を、「へんてこな音楽」を作ってみることで経験できるということもあるでしょう。(H.T.)

# SMF ART LABO

## SMFアートラボ 2011年11月12日 北浦和公園

### ラボ de コラボ

「SMFアートラボ」はアートの実験台。本田貴侶、内野務、KAPLの諸氏によるワークショップ、作品展示、また彫刻ライブ・ダンス・演奏などのパフォーマンス、アートマーケットなど、さまざまな素材を北浦和公園に投入して無造作にかき混ぜます。異ジャンルのアーティストたちが、ふらりと遊びに来た人たちや公園の光や木々、その場で出会った他のアーティストと化学反応を起こし、見たことのないものがまこっと生まれてくると実験成功。

パフォーマンスを終えた方たちに、いちばん気に入った作品とのコラボ写真を提案したところ、舞踏の山下浩人さんが選んだのは、ホンダ先生の大ケヤキの切り株。それをしばし眺めていた山下さんですが、いつのまにか切り株の穴の中にすっぽり、文字通りハマっていました。ケ

ヤキと山下さんは不思議に一体化し、原始の息吹を放っていたのです。

### 《似犬絵》大人気 学生アートマーケットと KAPLコーナー

たまたま各大学からの参加者が全員3年生だったので、ワークショップのテントには3年1組～4組の看板、そして若さあふれる面白い作品が並びました。中でも各テントの似顔絵コーナーが大人気。それも北浦和公園ならではのお客さま、お散歩ワンちゃんたちが似顔絵ならぬ「似犬絵」のはしごをしてました。5頭連れてこられた方は全コーナー制覇とか。

### 初めての試み フィナーレ

参加アーティストとSMFスタッフ全員集合による初のフィナーレ！なのに一人だけ、「やだ」と最後まで抵抗していたウチノ先生。仕方なくワークショップ広場から噴水前に連行。「しつこいな」とぶつぶ

つ言いながらも駆け足で登場した時には、いつの間にかスタッフの方たちと「トン

ギコ・ワークショップ」の大きな看板を持ちちゃってました。ずるい！映画より、ずっとずっとラブリーな生ウチノ先生でした。(S.Y.)



▲山下浩人さんと大ケヤキ。



▲大人気の似顔絵コーナー。



▲参加アーティストが揃ったフィナーレ。

## アートとまちのご近所づきあい

クリスマスモードで賑わううちに、鎮座まします人型干し芋。その名は《IMONINGEN》！「イモらしいよ」と書かれた赤いバッジが誇らしげです。

2011年12月、北浦和の西口銀座商店街を舞台にした《回遊美術館Ⅱ》は、アーティスト・商店会・美術館がタッグを組んで行ったプログラムです。会合を重ね、山本耕一郎さんの《北浦和出逢い景プロジェクト》が会期に先がけて進行していききました。11月半ばから北浦和に寝泊まりして制作活動を始めた山本さん、色々な「うわさ」が書かれた「うわさバッジ」を屋台で運び、バッジを身につけた人を写真に撮って展示していききました。商店街に溢れるたくさんの方々の笑顔。交わす挨拶も増えていきます。お風呂屋さんに空き店舗を借りてプログラムの実施本部にしたところ、お隣の八百屋さんが、毎日バッジをつけて来てくださるようになり、

ここを拠点に、参加アーティストそれぞれ、まちとの交流を深めていきました。

そんなある日登場したのが《IMONINGEN》で

す。本部の壁一面で戯れる、三友周太さんの《HIMONINGEN》へのオマージュでした。作者の八百屋さんは叱られやしないかとちょっと心配だったそうですが、思わぬ贈りものと遊び心にアーティストとスタッフ一同、大喜びしたのは言うまでもありません。アルバイトの大学生が専用の箱とバッジをつくって進呈し、プログラムから生まれたアートとまちとの関係の、ひとつのシンボルになりました。「いつもこんな調子で冗談ばかり。八百屋もいっけと吉本に入れば？なんてお客さんに言われちゃうのよ。」

照れ笑いするおかみさんのエプロン

## IMONINGEN

# あらわる!!

には「この職業向いてないらしいよ」のバッジがありました。

まちで交わされる小さなやりとりの積み重ねがプログラムを大きく支えていたと思います。「こういう催しは楽しくていいね。ワクワクするよ。」お肉屋さんやラーメン屋さんから頂いた言葉の通り、アートがまちの元気を引き出せたなら嬉しい限りです。美術館と商店街とで顔なじみが増え、次の展開を探っているところ。これからも互いに行き来し回遊しながら、縁をつないでいきたいです。(A.O.)



▲《北浦和出逢い景プロジェクト》(山本耕一郎さん)。



▲《HIMONINGEN》(三友周太さん)。

### 編集者のつぶやき...

音楽おそるべし(H.T.)

2012年、どんな展開になるでしょう…(H.O.)

今回のアートラボでのいろんな出会いが、いろんな拡がりを見せてくれますように。(S.Y.)

【S】擦った【M】揉んだで【F】踏み張る毎日。2012年はいい風吹くかな?(A.O.)